

幼児に讀んで聽かせる話

さ お り

一 櫻んぼの種

奈々ちやんは櫻んぼの種を一つ吞込んでしまひました。

「お母様、奈々子櫻んぼの種吞んじやつた。」

「おや／＼、それは大變な事をしたのね。今にお腹の中から櫻んぼの木が生えて來ますよ。」

奈々ちやんはびつくり、そつとお腹を着物の上から撫でて、お臍のあたりへ、もう櫻んぼの木が芽を出しはしないかと心配し始めました。

お腹の中から櫻んぼの木が生える、櫻んぼの木がお腹の皮を破つて、生えて來る。奈々ちやんは

其の日、一日思ひ出す度にお腹を撫でて心配して居りました。

「奈々子、風呂へ入れて上げよう、早くお出で。」夕方になつて、お父様がお呼びになりました。

奈々ちやんは飛んで行つて、お父様と一緒に風呂へはいりました。お父様に洗つて頂いてゐる間、奈々ちやんはお腹ばかり氣にして、撫でたり、さすつたり、お臍を撮んだりして居ましたが、其中にしく／＼泣出しました。お父様はびつくりして、

「奈々子、ぼん／＼が痛いのか。」とおつしやいました。

奈々ちやんはかぶりを振つただけで、何とも答へません。

「何だつてそんなに腹を撫てるんだ、腹の中に何か居るのか。」

お父様は奈々ちやんのお腹を抑へて御覧になつて「やつ、堅いね、こりや何か這入つてゐるな、堅いぞ。」

と仰山におつしやると、奈々ちやんは「わゝつ」と聲をたて、泣出しました。

二人がお湯から上つて來ると、お母様がいしい苺にお砂糖をかけて、

「さあ、奈々ちやんお上り、お父様も召上つて。」と出して下さいました。お皿の上の眞紅な苺を見ると、奈々ちやんは何も彼も忘れてしまひましたお父様も大喜び、

「こりや、御馳走だね。」

奈々ちやんも、お父様も、うまさうに食べました。

「お父様、苺の種無いの。」

「有るよ、小さいポツ／＼ね、食べると齒にさはつてプチ／＼つて言ふだらう、これが苺の種だよ。」

「お父様、苺の種、食べてもお腹の中かち生えないの。」

「生えないよ、枇杷の種だつて、葡萄の種だつて地面から生えるだけだよ。」

「ぢやあ、櫻んぼの種もお腹の中から生えないの」「お前櫻んぼの種を呑んだのかい。さうか道理で腹ばかり氣にして居るんだね。一寸腹を見せ。」

又、心配さうな顔をし出した奈々ちやんのお腹を、お父様は着物の上から抑へて見て、

「奈々子、安心しな、櫻んぼの種はもうないよ。奈々子のお腹がね、櫻んぼの種なんかいらぬや。」つて追出してしまつたよ。安心しな。安心しな。」

それをお聞きになつたお母様も嬉しうに、

「まあ、櫻んぼの種が追出されてしまひましたか
奈々ちゃんよかつたねえ、お母様も安心しました
よ」とおつしやいました。

二 ポチの手柄

ミサちゃんはお人形に自分のチャン／＼コを着
せて負んぶしてやりました。

お人形の名はあ子ちゃんと言ふ名です。あ子ち
ゃんは美しい袂の着物を着て、赤い帯を締めて居
ました、あ子ちゃんはおかつぱの髪の毛がふさ
／＼して可愛いお眼々をバツチリ明けて居ました
ミサちゃんは、

「お、可愛い、お、可愛い。」
と言つて、可愛がつて居ます。ミサちゃんのお母
様が、

「ミサちゃん、チャン／＼コをお着なさい、今日
は少しお寒いのですから。」

とおつしやつて、ミサちゃんにチャン／＼コをお
着せになりました。すると、ミサちゃんは、
「あ子ちゃん、チャン／＼コをお着なさい、今日
は少しお寒いのですから。」

と言つて、お人形にもチャン／＼コを着せました
其のチャン／＼コはミサちゃんので、お人形のあ
子ちゃんには大き過ぎました。それをお母様に手
傳つて頂いて紐で負んぶしてやつたのです。

あ子ちゃんの小さいお母様は、

「ねんねんよう、ねんねんよ。」

と、ゆずぶり／＼、お友達の花子さんのお家へ遊
びに出掛けました。

「只今。」

暫くしてミサちゃんは歸つて來ました。

「お母様、あ子ちゃんをおろして。」

表から大きな聲で呼びながら這入つて來ました。

「ミサちゃんかい、よくお守が出來ましたね、あ

子ちゃん、さ、あんり。」

お人形をゑろして上げようとして、お母様はびつくり、

「おや、お人形が居ませんよ。チャン／＼コの中がからつぽですよ。」

ミサちゃんはからつぽのチャン／＼コを見て顔色をかへました。そして、

「あ子ちゃん、あ子ちゃん——」

と、小さいお母様は泣出しました。

「ミサちゃん、花子さんのお家へ行つたんでしょ、歸りに落して來たのね。泣かないで、泣かないでさあ、見に行きませう。」

ミサちゃんはお母様に連れられて、花子ちゃんのお家の方へお人形を捜しに行きました。二人は道々あ子ちゃんのおべゝが、もう見えるか、もう見えるかと思つて、眼を大きくして捜し／＼行きました。お人形の影は何處まで行つても見當り

ません。とう／＼花子さんのお家まで行つても、

お人形は落こつて居ませんでした。花子さんも、

花子さんのお母様も、ミサちゃんのお人形が歸り路で居なくなつた事を聞いて、吃驚なさいました。

「誰かに拾はれたのでせうね。早くミサちゃんの所へ歸つて來るといゝのね。」

と、花子さんのお母様があつしやいました。

ミサちゃんは、べそをかきながら、お母様とお家へ歸りました。可愛いあ子ちゃんの事を、ミサちゃんもミサちゃんのお母様も心配して居ました。すると、

「御免下さい。」

と、近處の小母様が這入つていらつしやいました。母様の後から、お小母様のお家のポチが頭を下げてお供をして來ました。

「これミサちゃんのお人形さんでは御座いませんか。」

ミサちやんは小母様の所へ駈寄つて、

「これミサ子の。」

と、言ふが早い。小母様の手から、あ子ちやんを取つて抱つこしてやりました。

「ポチが今くはへて來ましたのよ。悪いポチです。ね、ミサちやん御免なさいね、ポチ、お詫びなさい。頭をお下げ。」

ミサちやんのお母様はあはてし、

「いゝえ、ミサ子が落して來ましたのを、ポチが拾つて呉れたので御座いますよ。ミサ子がポチにお禮を言はなければなりませんわ。ね、ポチ、どうも有難うよ。ポチは賢しい犬ね。」

ミサちやんもお母様と一緒になつて、

「ポチ有難う、ポチは賢しいね。」

と言つて褒めました。ポチは褒められて嬉しさうにミサちやんの顔を見上げて尻尾を振立てました。「ミサちやん、ポチに御褒美を上げなさい。」

「ビスケットを上げるわ。」

ミサちやんはビスケットを両手に擱んで來て、ポチにやりました。うまさうにビスケットを食べるポチを見て、小母様も、

「ポチや、お手柄だつたね。」
と、お褒めになりました。

